

桜蔭俳話会 四月句会 (第三一四回)

平成二十五年四月二十八日(日)

会場・旭区民文化センター(サンハート) 会議室

【秀句鑑賞】

鉛筆を削るにほひや暮の春

秀一

日常の身の回りの品を手で扱ったり、手慣れた所作をするときに季節の移ろいを感じ取る、という句立ては、古来からよく使われる作句法の一つである。

今でこそ筆記具の首座はボールペンに奪われた感があるが、鉛筆愛好家は少なからずいる。日常のとある時間の隙間に、溜めていた何本かの鉛筆を削るとき、鉛筆の軸材の独特な香りが身を包む。そのとき、過ぎ行く季節の間に出会った人々の顔が臉に浮かび、様々な出来事の断片が脳裏を走る。

この「鉛筆を削る句い」と組み合わせる季節は、春の終わりに限定されず、秋あるいは冬の終わりとすることもできるが、掲句では、作者は暮の春と断定した。作者が脳裏に浮かべた人々や出来事は、作者にとって肯定的な好ましいものであったのであろう。俳句には、知らず知らずの間に作者が垣間見えるところがある

【秀句鑑賞】

花冷えや書展の仮名の読めぬまま

友子

漢字文化圏のなかで日本独自の仮名文字は、それぞれ特定の漢字を崩して字体が考案されている。この崩し方には基本的なルールがあり、書展の出品者がこの基本ルールから大きく逸脱した者、あるいは所謂前衛派の書家でない限り、書展に自らの意思で立ち寄ろうとするほどの観覧者であれば、その仮名文字は読み取れるはずである。したがって、掲句は生まれない。

作者は仮名書の判読能力に関しては評者と同程度のレベルにあるのであろう。実際、評者は何度か書道展に招かれ、見事な仮名文字に出会っても、すぐに隣に貼られている活字体に毎度目をやって仕舞う始末である。聞けば作者のご夫君が句会場ちかくのホールの書展に出品されているとのこと。句会終了後にその書展をのぞいてみたが、案の定、評者には判読不能な作品が多かった。掲句は、仮名が読めないのに観覧しているこの我よ、と少し自嘲気味に詠んだものである。

「読めぬまま」と「花冷え」が両方ともネガティブであるので、「花冷え」に代えて「木の芽晴れ」のようにポジティブな季語にするとよい。

【秀句鑑賞】

リラ冷えのバルサミコ酢の甘さかな 明美

料理やグルメの門外漢である評者には初めて耳にする言葉であったが、辞書によればバルサミコ酢とは、イタリアの熟成期間が長い高級醸造酢であって、黒みを帯び甘みがあると言う。この句の上手いところは、「花冷え」、「さくら冷え」、「木の芽冷え」、「若葉冷え」という季語の代わりに「リラ冷え」を使用したことにある。これによって、句全体が洒落た印象のものとなり、「バルサミコ酢」が新鮮な意味ある言葉として響いて来る。リラ冷と甘さとの斡旋も良い。

掲句の意味は、リラ冷えの空気の中にたまたま使ったバルサミコ酢が甘かったと言っているだけである。俳

句は意味も大事であるが、俳句にはまた音の調べを楽しむ側面があることを再認識させられた。「バルサミコ酢」が俳句に使えると見てとった作者の眼力は鋭い。伝統的な句作りが多い中で、作者の意欲的な句作りには敬服する。

【秀句鑑賞】

年を経て一人暮らしも春景色

直子

人生のある時点から一人暮らしになった。一人暮らしを始めた経緯と当時の思いは、記憶の中に今も生きているかもしれないが、現時点では一人暮らしも佳きものかなと、達観する作者がそこにいる。

掲句の素晴らしいところは、自分自身の一人暮らしをこれも春景色の一部である、と自己の現状を肯定的に客観視しているところである。

究極の俳句は己れを詠むものだと言われるが、この句が正にそれである。人の心に深く沈潜する優れた境涯句は、皮相的な型通りの写生句をいつも凌駕する。

【互選句鑑賞】

さらはれし浜に泳ぐや鯉幟

ツル子

東日本大震災の津波被害を受けた海岸地帯の人々を想いやった句である。しかしながら、「泳ぐ」と「鯉幟」の間に切れ字の「や」を置いたのでは、「泳ぐ」が作者の使用意図とは別に、季語であると認識されてしまう。津波の襲来した浜辺付近を誰か人が泳いでおり、その上を鯉幟が風に吹かれている、という句になってしまう。人や建物が海に攫われて行ってしまった浜の空を「鯉幟が泳いでいる」ことを詠みたいのであれば、「泳ぐや」を消して、別の言葉に置き換えた方が良い。例えば、「高らかと」にすると、希望の象徴としての「鯉幟」の存在がより鮮明になる。

【自句自解】

逝く春や都電は音を轆きながら

守

一陣の風が落ち葉などを巻き上げ、それらが都電の路面に散乱する。そこに一台の都電が進入して来た。都電の前輪がレール上の散乱物を轆き、後続の車輪がその散乱物を更に轆いて行った。それはあたかも前輪が立てた音を後続の車輪が轆いて行くかのように聞こえた。

「音を轆きながら」のフレーズはそのときの音響的イメージを直感的に言葉に置換えたものである。大方の読み手にとっては、この「音を轆く」という表現は容易には理解できないものであるが、自分自身の得た初発の言葉を大事にすることにした。

【互選句鑑賞】

下萌えや箱根連山晴れわたる

幸

下萌えという近景に箱根連山という遠景を配置した伝統的な作り方による、平明な句である。下五の「晴れわたる」によって、春の息吹に満ち溢れた空気の中を山歩きに向かっている、という作者の生きている充実感や爽快感が過不足なく表現されている。山歩きを日常的に楽しんでいる作者ならではの句である。

「互選句鑑賞」

野天風呂かわらの上の春の雲

真三

作者のお人柄が現われたゆつたりとした叙景句である。技巧をこらさずに目に触れた光景を、そのとき受けた感動にしたがってありのままに詠んでいる。「かわら」が露天風呂の敷地を取り囲む瓦垣や瓦塀の天辺の瓦を指すものなのか、露天風呂から見える町並みの瓦葺き屋根を指すものなのか、判然としないが、評者としては後者をとりたい。とすれば、露天風呂という近景と、瓦葺きの町並みとその上にある雲という遠景を詠み込んだ句となる。

「かわら」の代わりに「薨」とすることもできる。薨には屋根の棟瓦の意味があるから、このようにすると、作者が疲れを解している露天風呂から、瓦葺きのしつとりした町並みが見渡せ、その町並みの上に春の雲がゆつたり漂っている情景が良く分かる。露天風呂の句は俗に流れやすく、作るのが難しいが、掲句は正統的な作り方に徹することにより成功している。

【互選句鑑賞】

ふらここや餓鬼大将の今はなき

ツル子

ブランコのある公園に餓鬼大将がいない、子ども皆がふらここを順番に平等に使っている、という句である。ただし、「今はなき」とすると、昔はいたが「今はいない」という断定の句になってしまう。評者の見聞では、餓鬼大将的存在が消えてしまったと言うのは、少し言い過ぎかも知れない。読み手には、今の時代には本当に餓鬼大将は存在していないのかという疑問が生じ、また、餓鬼大将消失の理由は何なのかまで考えさせられてしまう。いわゆる理屈っぽい句と受け止められ易い。

「今はなき」を「声のなし」に変えれば、餓鬼大将は今の時代もいるが、今現在、ふらこの付近には餓鬼大将の姿は見えないという句になるうか。

(文責 代表 増田 守)

